

多摩川流域のサクラの実態調査

平成 20 年度 報告書

森林総合研究所 多摩森林科学園

平成 20 年 10 月

多摩川流域のサクラの実態調査
平成 20 年度 報告書

目次

1.	はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
2.	調査対象と方法		
2-1.	調査対象	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
2-2.	サクラの名所候補地の現地調査方法	・・・・・・・・	p 3
2-3.	サクラの野生個体の現地調査方法	・・・・・・・・	p 6
3.	結果と考察		
3-1.	サクラの名所候補地	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 6
3-2.	野生のサクラ	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 13
4.	まとめ	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 21

・添付資料

サクラの名所 2008 年度撮影写真一覧 —市町村推薦箇所—

サクラの名所 2008 年度撮影写真一覧 —野生のサクラ—

確認された野生のサクラ水平分布図

確認された野生のサクラ垂直分布図

1. はじめに

サクラはもともと日本の山野に自生する植物であるが、現在では重要な観光資源でもある。ここでは多摩川流域における野生および植栽されたサクラについて、将来的に観光資源となりうる可能性を考慮して現況を調査することとした。

多摩地域全体の将来の姿を見据えた地域づくりに取り組むため、平成 19 年に設立された「美しい多摩川フォーラム」では、夢のシンボルプランのひとつとして、「多摩川夢の桜街道」プランを計画している。

この調査は平成 19 年度から平成 21 年度までおこなう予定とし、平成 19 年度は予備調査として、フォーラム会員となっている各市町村に対してアンケート調査をおこない、基礎的な情報を明らかにするとともに、文献から得られた多摩川流域の野生のサクラについて調査した。平成 20 年度は、こうして得られた基礎資料をもとに、実際にサクラが開花する時期に現地で調査をおこない、現地の実態を把握することとした。

本調査は「美しい多摩川フォーラム」から助成を受け、独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園がおこなった。とりまとめは森林総合研究所多摩森林科学園教育的資源研究グループ 岩本宏二郎主任研究員、および森林総合研究所森林植生研究領域群落動態研究室 勝木俊雄主任研究員がおこなった。

2. 調査対象と方法

2-1. 調査対象

調査エリアは、可能な限り広く多摩川流域を網羅することを目的とし、以下の区市町村を対象とした。東京都では、多摩地区のすべての市町村（昭島市、あきる野市、稲城市、青梅市、奥多摩町、清瀬市、国立市、小金井市、国分寺市、小平市、狛江市、立川市、多摩市、調布市、西東京市、八王子市、羽村市、東久留米市、東村山市、東大和市、日野市、日の出町、檜原村、府中市、福生市、町田市、瑞穂町、三鷹市、武蔵野市、武蔵村山市）および多摩川に面している大田区と世田谷区の合計 32 区市町村、神奈川県では川崎市の 6 区（麻生区、川崎区、幸区、高津区、多摩区、中原区、宮前区）、山梨県では甲州市、小菅村、丹波山村の 3 市村を対象とした（図－1）。なお、甲州市の大部分は富士川流域で占められているため、甲州市の調査対象は多摩川流域部分に限定した。なお、町田市など調査対象エリアの一部は厳密な地理的には多摩川流域となってい

ない地域も含まれているが、行政的な意味も含めた広い意味で「多摩地域」の現況を把握することを目的としているので、調査対象としている。

これらのエリアの中から、平成 19 年度にアンケート調査で得られた 67 ヶ所を「区市町村推薦地」として、可能な限り「サクラの名所候補地」現地調査の対象とした（表－1）。また、この 67 ヶ所以外でも文献などから得られた場所、あるいは現地で情報を得た場所なども「参考調査地」として、現地調査の対象とした。ただし、参考調査地は得られている情報に不備が多いことに加え、所有者・管理者などの確認を得ていない場所も含まれているため、今年度の報告では参考資料として扱い、原則的には区市町村推薦地を分析の対象とした。

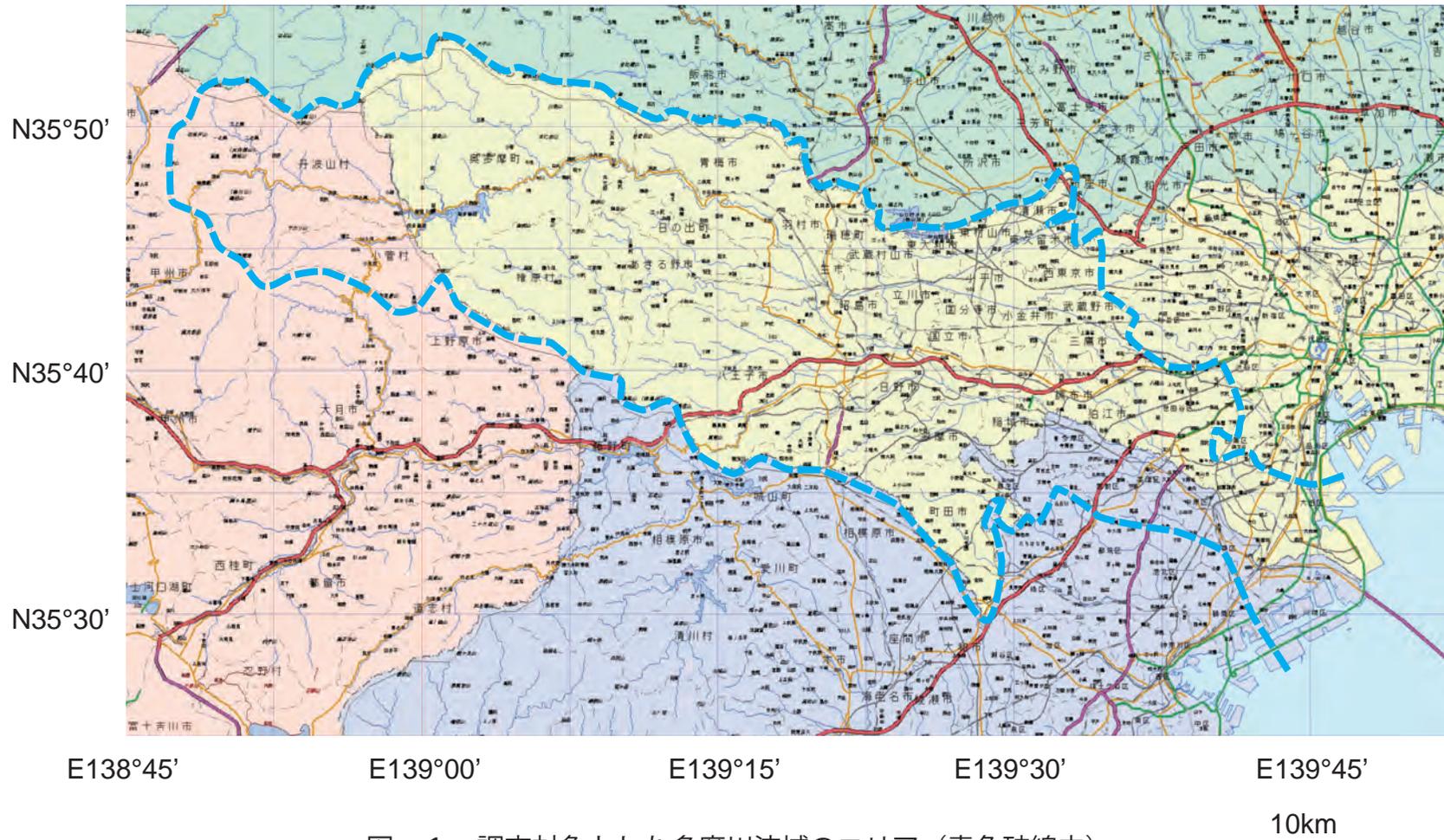
また、野生個体調査については上記のアンケートとは関係なく、調査エリアを可能な限り網羅するよう調査地域を設定した。

2-2. サクラの名所候補地の現地調査方法

調査は、区市町村推薦地 67 ヶ所および参考調査地において、可能な限りサクラが実際に開花している満開の時期に赴き、以下の 4 項目について調査票に記録するとともに、記録写真を撮影することでおこなった。また、サクラの名所候補地が広大である場合、複数箇所でも現地調査をおこない、実際に「花見」をおこなう立場からサクラがどのような状況なのかを把握することに務めた。

●調査地：現地で確認された調査地の名称、所在地を調査票に記入するとともに、実際に調査をおこなった地点を地図（1/5000 相当）に記入した。調査地の位置はフリーウェアの簡易 GIS ソフト（カシミール；<http://www.kashmir3d.com/>）を用いて緯度経度と標高を求めた。緯度経度については本来であれば国際基準である WGS84 測地系を用いるべきであるが、国内ではまだ一般的ではなく対照が困難になることが予想されるため、国内でも一般的な Tokyo 測地系を用いた。また、調査地の名称、所在地について、現地で不明であった場合はその後地図や文献などから得た。

●サクラ：サクラの名所候補地を代表すると思われる 1 点で直接目視できる程度の範囲（半径数十 m）のサクラについて、サクラの種類、本数、胸高直径、開花状況、健全度、腐朽・病虫害の有無などを記録した。調査対象が広大な場合、調査は多くのサクラの見物客が訪れると思われる数点で調査をおこなった。なお、サクラの種類については同定が困難である場合が予想されたので、可能な限り写真を撮影して、後日照会した。



図－1. 調査対象とした多摩川流域のエリア（青色破線内）

表-1. 区市町村推薦のサクラ名所候補地の名称と所在（網掛部は平成20年度に調査をおこなわなかった場所）

票ID	区市町村	名称	旧名称
S001	稲城市	三沢川側道	
S002	稲城市	稲城多摩川桜堤	
S003	羽村市	羽村市動物公園	
S004	羽村市	日野自動車羽村工場	
S005	羽村市	羽村堰と玉川上水	
S006	羽村市	桜つつみ公園	
S007	国立市	大学通り緑地帯	
S008	国立市	国立さくら通り	さくら通り
S009	小菅村	三ツ子山	
S010	小菅村	田元	小菅国道139号沿線
S011	狛江市	根川さくら通り	
S012	狛江市	西河原公園	
S013	昭島市	多摩川左岸堤防	
S014	府中市	是政緑地	堤政緑地
S015	府中市	四谷さくら公園	
S016	府中市	府中さくらの広場	
S017	府中市	府中桜通り	桜通り
S018	府中市	多磨霊園南参道	
S019	府中市	府中多摩川通り	多摩川通り
S020	府中市	スタジアム通り	スタジアム通り外4路線
S021	青梅市	釜の淵公園	青梅市釜の淵公園
S022	八王子市	滝山自然公園	都立滝山公園
S023	八王子市	浅川の桜並木	
S024	八王子市	円通寺	
S025	八王子市	広園寺	
S026	八王子市	多摩森林科学園	森林総合研究所多摩森林科学園
S027	八王子市	浄福寺	
S028	八王子市	高尾山一丁平	
S029	八王子市	富士森公園	
S030	八王子市	片倉城跡公園	
S031	八王子市	高楽寺	
S032	福生市	福生堤防	多摩川堤防沿い桜
S033	あきる野市	光巖寺	
S034	あきる野市	秋留台公園	都立秋留台公園
S035	あきる野市	小峰公園	都立小峰公園
S036	あきる野市	あきる野総合グラウンド	
S037	あきる野市	二宮公民館	二宮公民館周辺
S038	大田区	馬込桜並木	
S039	大田区	池上本門寺	本門寺公園及び池上本門寺周辺
S040	大田区	多摩川台公園	
S041	大田区	桜坂	
S042	大田区	洗足池公園	
S043	大田区	ガス橋緑地	ガス橋緑地付近
S044	大田区	東糞谷第一公園	
S045	昭島市	昭和公園	昭島公園
S046	日野市	コニカミノルタ工場	コニカミノルタ工場桜並木
S047	日野市	京王平山緑地	
S048	日野市	黒川清流公園	
S049	日野市	旭が丘中央公園	
S050	日野市	旭が丘グリーンベルト	
S051	日野市	日野中央公園	日野中央公園～日野市役所
S052	日野市	平山堤	平山堤桜並木
S053	日野市	日野橋南詰	多摩川日野橋南詰桜並木
S054	日野市	根川沿いの桜	
S055	奥多摩町	奥多摩湖の桜	
S056	多摩市	川井家のシダレザクラ	
S057	調布市	神代植物公園	都立神代植物公園
S058	調布市	桜堤通り	桜堤通りの桜
S059	調布市	ハリウッドの桜	
S060	調布市	深大寺通り	
S061	調布市	神代植物公園通り	
S062	調布市	榎橋	榎橋周辺
S063	多摩市	乞田川	乞田川沿い
S064	多摩市	富士見通り	
S065	多摩市	多摩中央公園	
S066	立川市	立川公園	
S067	立川市	柴西公園	

●管理状況：剪定や支柱、保護の有無や表土の露出部分のパーセンテージ、表土の状態や立地を記録した。なお、サクラの管理については、土壌条件に問題がある場合が多いため、可能な限り根元付近の様子を写真で撮影した。

●利用状況：サクラを見るためにかかる利用料や一般利用者が利用できる駐車場の有無、公共交通機関を利用したアクセス方法と時間、「花見」のためのイベントなどについて記録した。またその他に「花見」に関して気がついた点があれば記録した。

これらの実測記録から、多摩川流域におけるサクラの名所候補地の簡単な分析を試み、その特徴を明らかにした。

2-3. サクラの野生個体の現地調査方法

野生個体の調査では、可能な限りサクラ類が開花している時期に、徒歩あるいは車で調査対象エリアを踏査し、実際に咲いているサクラの種類・開花状態などを記録した。また位置についてはGPSを用いて測定し、簡易GISソフトを用いて緯度・経度・標高を特定した。なお、種類についてはその場で同定が困難である場合もあるため、可能な限り花の拡大写真を撮影した。

こうして得られたデータを用い、サクラ類の各種類について、観察された水平位置・標高・開花状況のデータから、どのような範囲に分布し、どのような時期に開花するのか、分析した。

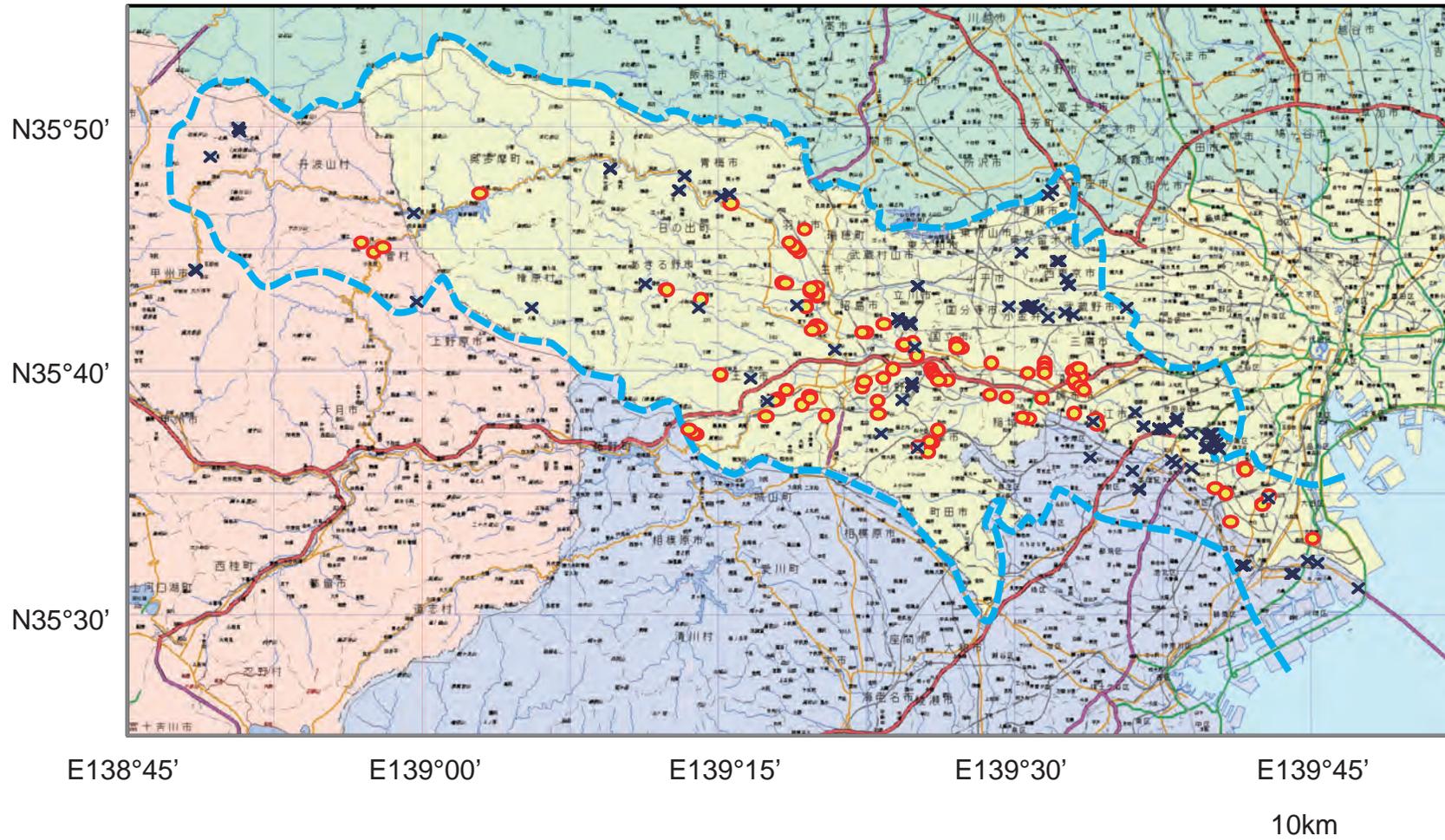
3. 結果と考察

3-1. サクラの名所候補地

平成19年度の調査で得られた67ヶ所のうち、平成20年度は4ヶ所を除く63ヶ所135地点で現地調査をおこなった（表-1）。なお、羽村市の羽村市動物公園と府中市の府中さくらの広場、八王子市の多摩森林科学園、日野市のユニカミノルタ工場では諸事情から調査をおこなうことができなかった。また、この他にも参考調査地として54ヶ所114地点で現地調査をおこなった。



写真-1. 浮島町公園の‘染井吉野’



図－2．調査をおこなったサクラの名所候補地（赤丸：区市町村推薦地；黒×：参考調査地）

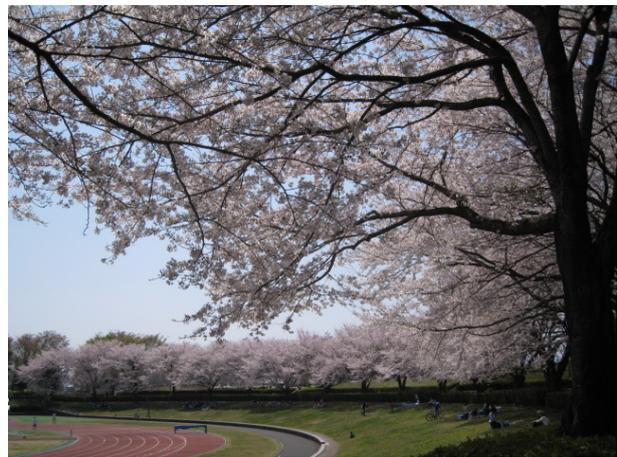
位置：すでに昨年度の報告でも指摘されているように、区市町村推薦の 67 ヶ所は小菅村と奥多摩町の 3 ヶ所を除くと中・下流域に集中している（図－2）。しかしながら、この他にも参考調査地としては多くの場所が上流域にも確認されたことから、今後はさらに上流域での調査が求められると考える。また、アンケート調査をおこなっていない世田谷区や川崎市などの区市町村を含めて総合的に多摩地域のサクラの名所を選定するべきであると考え。なお、今回の調査において最も下流で‘染井吉野’が確認された場所は川崎区の



写真－2. 一ノ瀬高原の‘染井吉野’

公園（標高 3m 写真－1）であり、上流では甲州市の一ノ瀬高原（標高 1252m 写真－2）であった。この間の直線距離は約 94km であり、およそ 100km が多摩地域のサクラの名所の範囲として認識すればよいと考えられた。

サクラの種類：今回現地調査をおこなった 135 地点のうち、およそ 2/3 の 89 地点のサクラが‘染井吉野’であった。他には‘枝垂桜’や‘八重紅枝垂’、‘アメリカ’、‘関山’、‘御衣黄’、‘小彼岸’、‘大寒桜’、‘普賢象’などの栽培品種やオオシマザクラやヤマザクラが植栽されている例があったほか、小菅村の三ッ子山では自生のエドヒガンやマメザクラなどが見られることが特徴的であった。なお、本数でみると、記録されている 5251 本中およそ 92% の 4855 本が‘染井吉野’であり、改めて多摩地域のサクラの名所において‘染井吉野’が圧倒的に多いことが示された。



写真－3. 秋留台公園の‘染井吉野’の並木



写真－4. 光厳寺のヤマザクラ

サクラの本数：今回の現地調査では、

1点から見える範囲でサクラの本数を測定するという手法を用いたため、最大でも100本程度と名所内の最大本数10,000本と比較すると少なくなっている。ただし本数が多い場所の多くは並木あるいは公園などにまとめて植栽された‘染井吉野’であった(写真-3)。一方八王子市の高楽寺の‘枝垂桜’やあきる野市の「光厳寺のヤマザクラ」(写真-4)、多摩市の「川井家のシダレザクラ」(写真-5)のように、1本あるいは、少数であっても「花見」の対象となるような鑑賞価値の高い木もあった。

サクラのサイズ： サクラのサイズにおいて最大であったものはあきる野市の「光厳寺のヤマザクラ」(写真-4)の胸高直径約170cmであった。次に大きなサイズは多摩市の「川井家のシダレザクラ」(写真-5)の胸高直径約110cmであるので、「光厳寺のヤマザクラ」の大きさは際だっている。その他、環境省の定める巨樹の基準で



写真-5. 川井家のシダレザクラ

ある胸高周囲長300cmを超えるような個体は、調査対象エリアからやや外れる甲州市の「雲峰寺のサクラ」のエドヒガンの直径約160cmのみであった。しかしながら、目測で80cmほどの個体として、あきる野市の小峰公園‘染井吉野’や日野市の旭が丘グリーンベルトの‘染井吉野’、調布市の神代植物公園の‘染井吉野’などが記録されており、今後は「巨樹」クラスの‘染井吉野’が多く出現することも予想される。

サクラの開花日： 開花時期の概要を把握するために、各調査地点における‘染井吉野’の開花状況から満開日(木全体のおよそ8割が開花した日)を推定し、調査地点の標高との関係を示した(図-3)。2008年の場合、もっとも早い満開日は狛江市の根川さくら通りなどの3月26日であり、もっとも遅い満開日は甲州市一ノ瀬高原の5月3日であった。多くの調査地において満開日と標高の間には強い相関が見られた。一部の低標高域に合致しないデータが見られるものの、これは慣れていない調査員によるデータの観測精度の問題と考えられた。この結果、多摩川流域においては高標高域まで含めると、およそ40日間にわたって、‘染井吉野’が鑑賞できることが示された。‘染井吉野’より早咲きの‘寒桜’や‘小彼岸’、遅咲きの‘関山’や‘普賢象’などを含めると、3月

上旬から 5 月下旬までなんらかのサクラが開花していることになる。ただし、標高 600m を超える高標高域ではサクラの植栽地は数が少ない。

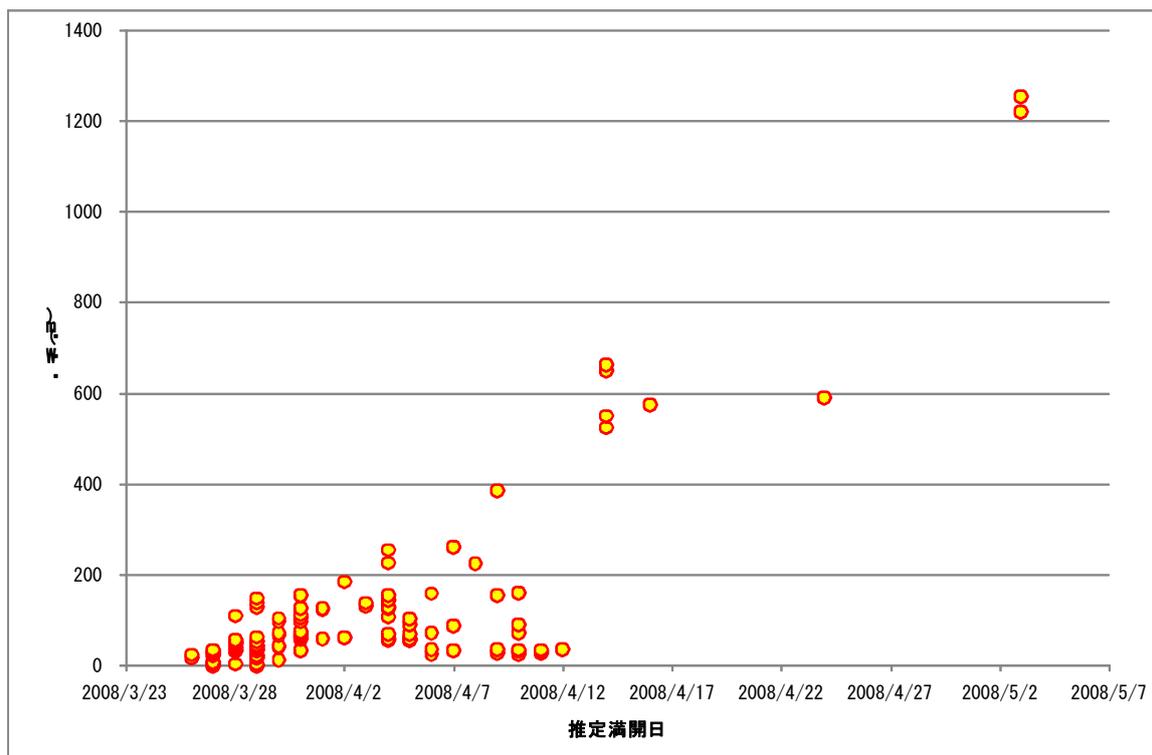


図-3. ‘染井吉野’の推定満開日と標高の関係

病虫害： サクラに対する病虫害として、てんぐ巢病が 13 地点から報告された（写真-6）。いずれも‘染井吉野’に罹病していた。てんぐ巢病が発生する地点の特徴として空中湿度が高いことが指摘されている。今回の調査結果からも、標高 120m 以下の中・下流域の‘染井吉野’では 64 地点中 2 地点しかてんぐ巢病は確認できなかったが、標高 120m 以上の山間部では 27 地点中 11 地点の高い頻度でてんぐ巢病が確認された。高標高域では管理がなされていない場合が多いことも考えられるが、てんぐ巢病が発生しやすい環境条件であることが示されていると考えられる。また、10 地点で幹の腐朽が見られた。このうち 9 地点は‘染井吉野’であり、残る 1 地点はヤマザクラであった。



写真-6. 奥多摩湖の‘染井吉野’にみられたてんぐ巢病

管理状況： 今回の調査では概観から管理状況を推測したため、下草刈りや防虫剤、施肥などについてのデータは得られなかったが、剪定作業については123地点中およそ3/4の93地点でおこなわれていることが確認された。ただし、支柱を用いているのは123地点中19地点、なんらかの外科的保全処理は122地点中5地点であり、またそれ以外の積極的な管理はあまり確認できなかった。なお、外科的保全処理がおこなわれていた場所は、あきる野市の光厳寺、大田区の馬込桜並木と池上本門寺（写真－7）・洗足池公園などであった。また、表土の状態をみ



写真－7. 池上本門寺の‘染井吉野’にみられた外科的保全処理のあと

ると、公園では50地点中踏み固められた不健全な土壌である場合がおよそ1/3の16地点あったうえに、表土自体が70%ほどしか露出しておらず、劣悪な生育環境であることが示された。さらには道路脇の並木においては、28地点中およそ半分の12地点で踏み固められた不健全な土壌である上に、露出している表土は30%程しかないことが示された（写真－8）。堤防においても露出している表土は50%ほどであり、記録がなされた122地点のうち100地点と、8割を占める公園・道路脇・堤防の植栽環境が劣悪であることは、今後の大きな問題であると考えられる。



写真－8. 三沢川側道のオオシマザクラの根元

利用状況： 駐車場については記録されていた122地点中およそ1/3の39地点では駐車場があったが、残りの83地点では駐車場がない、もしくはあっても使えない状況であり、「花見」客



写真－9. 滝山自然公園における花見イベント

にとって公共の交通機関が重要であることが示された。また、「サクラまつり」などなんらかの「花見」に関するイベントをおこなっていた場所は 101 件中、およそ 1/4 の 27 件しかなかった。調布市の神代植物公園や八王子市の滝山自然公園、大田区の洗足池公園などのような公園のほか、羽村市の羽村堰と玉川上水や福生市の福生堤防のように堤防をもちいたイベントが確認された。

立地環境： 立地環境を大別すると、122 点の調査点のうち、22 点が堤防、28 点が道路、59 点が公園、10 点が寺社などであり、これらは以下の 4 タイプにまとめられた。

●堤防の‘染井吉野’並木

羽村市の羽村堤と多摩川上水や稲城市の三沢川側道など、多摩川や多摩川に流れ込む河川、あるいは多摩川から流れる水道沿などの堤防に植栽されたサクラの並木が、多摩川流域において他地域と比較してもっとも特徴がある名所だと考えられる。古くは小金井市の多摩川上水などヤマザクラなども植栽されていた例も見られるが、現在ではその多くは‘染井吉野’が列状に植栽されている。ただし堤防は車道や歩道としても利用されており、サクラの生育環境としては適切な環境が保たれていないケースが大部分であった。また、大田区の馬込桜並木のように現在では街路の並木になっているものも、植栽当時は小川沿いであったものがその後の暗渠化によって変化したケースもある。実際に樹齢が 100 年を超えるようなサクラの個体は数少なく、今後はどのような管理をおこなってサクラに好適な環境を維持していくのかが大きな問題であると考えられる。

●街路の‘染井吉野’並木

国立市の大学通り緑地帯や府中市のスタジアム通りなど街路樹として植栽されたサクラの並木のタイプである。上記の堤防に平行している道路沿いの並木も場合によっては街路の並木としても良いかもしれない。街路の並木タイプはふつうに日本全国で見られるもので、際だった特徴を持つものではないが、身近に見られるサクラとしての価値はある。堤防タイプと同様に‘染井吉野’が植栽される場合が多い。車道沿いであることが原則なので、植栽環境としては堤防よりも悪いケースが多く、管理上の問題点も多数ある。戦前から維持されている国立市の大学通り緑地帯は例外的な存在であり、大部分の道路沿いの並木は、大田区の馬込桜並木やガス橋緑地のように、衰退して枯死する個体が増加することが予想される。

●公園のサクラ

八王子市の滝山自然公園や調布市の神代植物公園のように、公園あるいは公共の施設内に多数のサクラを植えるタイプである。堤防や道路の並木とは異なり、サクラの下は自由に利用できる空間となっている場合が多く、「花見」として利用されるケースはこのタイプが多いと考えられる。しかしその反面、土壌が踏み固められて劣悪になっているケースが多いことが観察されており、将来は衰退して枯死する個体が増加することも考えられ、土壌の管理が今後の大きな問題になると考えられる。‘染井吉野’が植栽されている場合が最も多いが、ヤマザクラやオオシマザクラ、あるいは‘八重紅枝垂’や‘普賢象’などの栽培品種など様々な種類のサクラが植栽されることも多い。

●名木

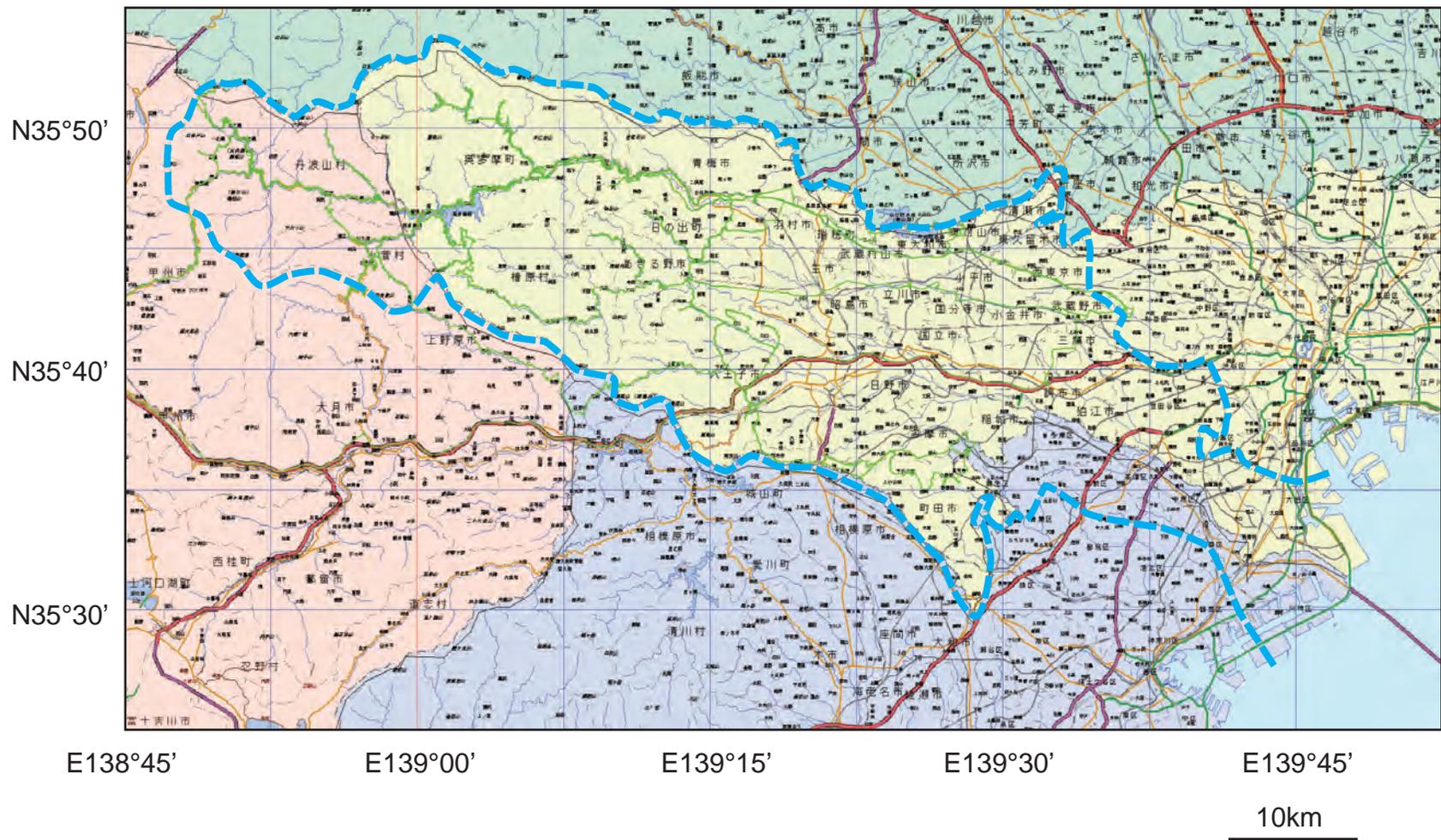
あきる野市の光厳寺や多摩市の「川井家のシダレザクラ」などサクラの老木・大木などのタイプである。植栽された‘染井吉野’がこうして注目されるケースはなく、寺院や神社のエドヒガンやヤマザクラの老木であるケースが大部分である。全国的には集客力がある観光資源としてサクラが取り上げられる場合、この名木タイプであることが多い。しかしながら多摩川流域における今回の調査では、6ヶ所のみであった。ただし、参考調査地として他にも数カ所確認されており、今後の調査によってはこうした名木タイプの名所が増加する可能性は残されている。

3-2. 野生のサクラ

野生のサクラについては、3月31日より5月22日までの間、調査をおこなった。調査はおもに町田市・八王子市・あきる野市・日の出町・青梅市・檜原村・奥多摩町・小菅村・丹波山村・甲州市でおこなった（図-4）。この結果、調査エリアから野生のヤマザクラ・カスミザクラ・オオヤマザクラ・エドヒガン・チョウジザクラ・ミヤマザクラ・マメザクラ・タカネザクラの合計8種が確認された。参考資料に確認された各種の水平分布位置と、経度と標高位置の関係図を示した。以下、各種の分布と開花期の特徴について記述する。

●ヤマザクラ *Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H.Ohba var. *jamasakura*

ヤマザクラは出現した種のうち、町田市から甲州市のもっとも広い範囲で確認された。標高で見るとおよそ100～900mの間に出現しており、多摩川流域の丘陵部から山地ではふつうに見られる種であると考えられる。コナラ林などの



図ー4. サクラの野生個体調査をおこなった踏査ライン（緑ライン：都心部・沿岸部の緑ラインは無関係）

二次林を構成する種のひとつでもあり、生育可能な環境は山地ではきわめて広い。ただし、都市部では天然生の二次林は大きく失われており、ヤマザクラの分布地も分断されている。もっとも下流で見られる野生のヤマザクラは川崎市の丘陵部の二次林に存在すると考えられるが、実際に現地を調査して確認する必要がある。町田市で



写真-10. ヤマザクラの花

は4月2日頃、奥多摩町では4月24日頃が満開なので、およそ20日間程度はヤマザクラの花見を楽しむことが可能である。なお、奈良県の吉野山のように野生のヤマザクラを鑑賞対象とする場合もあるが、多摩川流域では野生のヤマザクラの林分を観賞用に整備している例は確認されなかった。ただし、公園などでは植栽されているヤマザクラは数多く観察されており、今後は野生のヤマザクラについて「花見」目的に管理する可能性は高いと考えられる。

●カスミザクラ *Cerasus leveilleana* (Koehne) H.Ohba

カスミザクラは丘陵部ではほとんど見られず、八王子市以西の山地で確認された。標高では200~1400mに出現しており、山地では一般的な二次林構成種であると考えられる。分布地の大部分ではヤマザクラと同所的に出現するため、混同されることも多いが、ヤマザクラと比較して花期が遅いこと、若芽が緑褐色であることなどから



写真-11. カスミザクラの花

遠目でも明瞭に区別することが可能である。八王子市では4月16日頃、檜原村では5月4日頃が満開であるので、ヤマザクラと同様におよそ20日間程度花見を楽しむことが可能である。なお、カスミザクラは花期が遅いことから他の地域でもほとんど「花見」の対象とされていないが、多摩川流域でも観賞用に整備している例は確認されなかった。ただし、花自体は鑑賞価値が低いものではないことから、将来的には他のヤマザクラなどと組み合わせたサクラの名所の素材として利用が期待される。

●オオヤマザクラ *Cerasus sargentii* (Rehder) H.Ohba var. *sargentii*

オオヤマザクラは檜原村・奥多摩町・甲州市などの山地の一部でだけ確認された。標高では 800～1800m に出現しており、ヤマザクラとはほとんど分布域が重なっていない。カスミザクラとは同所的に出現する場合も多いため、混同されることもあると考えられる。分布域が狭いものの出現する標高域が広いため、満開の期間は 4 月



写真－12. オオヤマザクラの花

20 日頃から 5 月 20 日頃とほぼ 1 月の間花見を楽しむことが可能である。オオヤマザクラは北海道や東北ではヤマザクラあるいは‘染井吉野’に替わる「花見」の対象とされる場合があるが、多摩川流域でももっとも標高が高い甲州市の一ノ瀬の集落周辺では明らかにオオヤマザクラを植栽しており、観賞用に利用されていた。また、奥多摩湖など本来の生育地より低標高地でも植栽されていたことは、オオヤマザクラが「花見」の対象樹種として広く使われていることを示すものである。今後も高標高域における素材としては利用が進むものと考えられる。

●エドヒガン *Cerasus spachiana* (Lavallée ex H.Otto) H.Otto



写真－13. エドヒガンの花



写真－14. 小菅村の「牛会桜」

エドヒガンはカスミザクラと同様に、丘陵部ではほとんど見られず、八王子市以西の山地で確認された。標高では 200～1000m に出現しており、この点でもカスミザクラとほぼ一致している。ただし、山地の典型的な二次林であるコナラやミズナラなどの二次林よりも、より自然度が高い天然林で多く出現する

傾向があるように思われた。開花期は4月1日頃から5月1日頃までで、ほぼ1月の間花見を楽しむことが可能である。エドヒガンの栽培品種の‘枝垂桜’は多くの寺社や公園に植栽されており、「花見」の対象として用いられているが、野生のエドヒガンが「花見」の対象として整備されている例はほとんど無かった。唯一、小菅村の「牛会桜」と名付けられているエドヒガンの巨木（直径およそ70cm）が観光資源として活用されていた。なお、牛会桜の看板には「ヤマザクラ牛会桜」と表記されているが、修正したほうが良い。このようにエドヒガンは「花見」の資源としてきわめて貴重な存在であることから、今後は野生個体のさらなる活用が望まれる。

●チョウジザクラ *Cerasus apetala* (Siebold & Zucc.) H. Ohba var. *apetala*

チョウジザクラはカスミザクラやエドヒガンよりもさらに西部の山地で確認された。標高では500～1000mに出現しており、この点でもカスミザクラなどとは分布域がややずれている。観察された開花期は4月10日頃から4月20日頃までで、ほぼ10日間と短かったが、実際にはもっと長いと思われる。チョウジザクラは花卉の直径が約1cmと小さいことに加え、花と同時に葉芽も展開するため、開花しても花はまったく目立たない。また大きくなってもせいぜい樹高は4m程度なので、「花見」の対象とはならない。今回の調査でもチョウジザクラを「花見」の対象としている例は全くなかった。しかしながら、チョウジザクラは種間雑種を多く形成しており、今回の



写真－15. チョウジザクラの花



写真－16. 満開のチョウジザクラ×エドヒガン

調査でもヤマザクラ・エドヒガン・マメザクラなどとの種間雑種が確認された。その中には明らかに「花見」目的で残されている個体も確認されており、将来はこうした種間雑種の素材として、「花見」に栽培品種などが利用されることが期待される。

●ミヤマザクラ *Cerasus maximowiczii* (Rupr.) Kom.

ミヤマザクラは今回の調査では、西部の山地の三頭山および笠取山でのみ確認された。標高では 1100～1800m に出現しており、ヤマザクラやエドヒガンの出現する標高より明らかに高い。今回の調査ではこうした高標高域の調査が不十分であったため、ミヤマザクラは 2 ヶ所でしか確認されなかったが、八ヶ岳などでの観察では標高 1200～2400m の亜高山域まで広く確認されていることから、多摩川流域でもこうした高標高域には広く分布していると考えられる。開花期については今回残念ながら開花している個体のデータが少なかったので示すことが出来ないが、およそ 5 月中旬から 6 月中旬ごろまで開花していると考えられる。ミヤマザクラの花は開花期が遅いことに加え、葉が展開したあとに開花することから「花見」の観賞用に用いられることはない。また、チョウジザクラのように種間雑種を形成することも少ないので、サクラの仲間ではあるが「花見」のサクラとしては外してよいと考えられる。



写真-17. ミヤマザクラの蕾



写真-18. ミヤマザクラの花（八ヶ岳撮影）

●マメザクラ *Cerasus incisa* (Thunb. ex Murray) Loisel. var. *incisa*

今回の調査では、野生のマメザクラは小菅村と甲州市で確認された。標高では 500～1100m に出現している。しかしながら、今回確認された個体の多くは人里近い場所で確認されており、人為的な影響が疑わしく、本来の自生分布域であるのか判断するには、今後のより詳細な検討が必要と考えられ



写真-19. マメザクラの花

る。また、ブコウマメザクラ *Cerasus incisa* var. *bukosanensis* (Honda) H. Ohba は残念ながら今回の調査では確認することは出来なかった。これまでの報告からは多摩川源流部の石灰岩地にブコウマメザクラがあるとされている。踏査調査が不十分であったことから確認されなかったものと考えられるが、あったとしてもきわめて分布域が狭く、個体数が少ないと考えられる。ブコウマメザクラは国が指定する絶滅危惧植物でもあることから、次年度には重点的に調査をおこなう必要があると考えられる。マメザクラの開花期は4月10日頃から5月1日頃のおよそ20日間であった。

一方、マメザクラと他種との種間雑種は町田市から甲州市まで広い範囲で観察された。エドヒガンとの種間雑種と考えられるヤブザクラ *Cerasus hisauchiana* (Koidz. ex Hisauti) H. Ohba とホシザクラ *Cerasus tama-clivorum* (Oohara, Seriz. & Wakab.) H. Ohba の他にもヤマザクラやチョウジザクラとの種間雑種と考えられる個体が確認された。こうした個体の中でもヤブザクラとホシザクラは開花期が‘染井吉野’よりも数日早いことに加え、花付きがよく、花弁の色も淡紅色であり、鑑賞価値が高い。また、管理も比較的容易であること、挿し木で容易に増えることなどの性質を考えると、公園などに「花見」目的で用いる樹種としてはきわめて価値が高い。さらに、ヤブザクラとホシザクラは一部相模川流域にも分布しているが、多摩川流域が分布の中心地である。郷土樹種としての価値もあることから、今後はこれらの利用を積極的に考えるべきである。



写真－20. 公園に残されていたヤブザクラの木



写真－21. ホシザクラの花

●タカネザクラ *Cerasus nipponica* (Matsum.) H.Ohba var. *nipponica*

タカネザクラは今回の調査では笠取山でのみ観察された。出現した標高は 1600～1900m であった。この標高域ではオオヤマザクラも同所的に分布しており、種間雑種を形成している可能性も考えられるので、注意して同定する必要がある。なお、タカネザクラはこうした山地帯上部から亜高山帯域には広く分



写真-22. タカネザクラの花

布することが知られており、多摩川流域でも笠取山だけではなく、雲取山などに広く分布していることが予想される。次年度にはこうした地域についてもさらに調査を進める必要がある。開花期は 5 月 10 日頃から 5 月 20 日頃と観察されたが、実際にはもっと高標高域ではさらに遅くまで開花していると考えられる。なお、タカネザクラの花自体はマメザクラなどと同様に鑑賞に堪えうる性質をもっているが、花と同時に葉芽が展開する個体が多い、低標高域では育成が困難であることなどから「花見」の観賞用に用いられることは少ない。変種のチシマザクラが北海道の一部で「花見」に用いられていることが数少ない例である。しかし、タカネザクラはオオヤマザクラよりも高標高域に分布しており、今後はこうした地域における素材としてより有効に用いることが考えられる。

●その他のサクラ

多摩川流域に本来自生しているサクラ類はすでに述べた 8 種のみであるが、それ以外に栽培されていた個体から逸出したサクラ類が確認されている。オオシマザクラ *Cerasus speciosa* (Koidz.) H.Ohba は本来伊豆半島や伊豆諸島に分布する種であるが、関東南部では江戸時代以前より薪炭林に植栽されてきた歴史がある。今回の調査でもこうした薪炭林由来と考えられるオオシマザクラが町田市において確認された。また、近年では「花見」の観賞用に公園などにオオシマザクラが植栽されることも多く、こうしたオオシマザクラ由来と考えられる個体も八王子市で確認された。また、多摩川流域でもっとも数多く植栽されている「染井吉野」についても近くのおオシマザクラやヤマザクラと交雑したと考えられる個体が生じていることが確認されており、こうした「遺伝子汚

染」が問題となっている。‘染井吉野’は比較的繁殖力が弱いため大規模に‘染井吉野’由来の個体が増殖することはないと考えられるが、あまりにも多くの‘染井吉野’が植栽されており、今後は「遺伝子汚染」について注意していく必要がある。したがって「遺伝子汚染」に配慮すると、野生のサクラが分布する地域において「花見」のサクラを整備する場合、今後は安易に‘染井吉野’やオオシマザクラを植栽するのではなく、可能な限り自生のサクラを増殖することが望まれる。

4. まとめ

平成 19 年度のアンケート調査をもとに、63 ヶ所のサクラの名所候補地について現地調査をおこなったところ、大きく 4 タイプに区分された。「堤防の‘染井吉野’並木」はもっとも多摩川流域を特徴づけるタイプであるが、今後は管理が大きな問題となることが予測される。「街路の‘染井吉野’並木」は身近にサクラと接するタイプであるが、短い期間で衰退することが予想される。「公園のサクラ」は‘染井吉野’以外のサクラも含まれ、お花見の場としても重要なタイプであるが、やはり今後の管理が大きな問題となることが予測される。「名木」は観光資源として貴重なタイプであるが、多摩川流域では数が少ない。平成 21 年度には今年度調査できなかった地域を含め、より網羅的に現地調査をおこなうことで、多摩川流域におけるサクラの名所候補地の全体像をまとめる予定である。

一方、野生のサクラの調査では、8 種のサクラの分布状況の概要が把握され、各種の特徴が明らかとなった。なかでも分布が確認されたエドヒガンとオオヤマザクラ、ヤブザクラ、ホシザクラについては鑑賞価値が高く今後の活用が考えられた。しかしながら、最も希少なブコウマメザクラについてはまったく確認することが出来なかった。また、丘陵部から山地帯下部に出現する種についての概要はほぼ確認できたが、山地帯上部から亜高山帯に出現する種については、調査が不十分であった。次年度はこうしたブコウマメザクラや高標高域の調査を重点的におこなう必要がある。